

●南アルプス市ふるさと人物室 第2回展示
「外交官 埴原正直×使命」

会 期：7月1日(土)～7月27日(木)
7月29日(土)～9月24日(日)
※一部展示品の入替えがあります

会館時間：平日 9:30～19:00
土・日・祝日 9:30～17:00
休館日：祝日の翌日、月末休館日
入場無料

場 所：南アルプス市小笠原1060-1
郷形生涯学習センター内
主 催：南アルプス市立中央図書館
お問い合わせ：TEL 055-280-3300(代表)



駐米大使 埴原正直
山梨に生まれ 明治・大正期の
日米外交に尽くした栄光と
波乱を解き明かす

2011年9月1日 初版発行

(自費出版で学校等へ無料配布、現在在庫なし。
県立図書館、南アルプス市立図書館等で閲覧可能)



■埴原が編集委員を務めた「早稲田学報」

埴原は、在学中にもめざましい活躍をします。大学創設の功労者の一人である大野為之から、大学の学術誌「早稲田学報」の編集委員を任せられます。初の学生編集委員でした。卒業時には、卒業生総代を務めています。卒業後間もなくには、外交学の有賀長雄とともに、「外交時報」という外交専門誌の創刊にも携わります。これは、日本の外交雑誌の草分けとなり、その後、百年刊行された雑誌でした。

人を愛し、
愛された人生

大学を卒業した埴原は、東洋経済新報社に勤務後、外交官試験に合格。初任地は、中国の厦門(フモイ)でした。その後、大韓帝国を経て、24歳の時に外交官補としてアメリカ勤務となります。

当時、国家公務員となるのは、東京大学出身者が圧倒的に多く、私立大学出身者は、公務員になってもなかなかトップにまでは出世できないという時代でした。そのなかで埴原は順調に経歴を重ね、39歳でサンフランシスコ総領事、43歳で外務次官となります。いわゆる副大臣の地位です。そして47歳で、アメリカの特命全権大使にまで上りつめます。

アメリカでの埴原は、「ハニー」の愛称で親しまれ、たびたび新聞にも取り上げられる人気者でした。1908年(埴原31歳)には、暴走した馬車から若い女性を救い出したというニュースが掲載され、



■明治42年の「イブニングワールド」紙(埴原33歳)

ある時は、社交界で資産家の娘たちから人気を集めているという記事が載るなど、物珍しさだけではなく、注目を集めていたようです。

埴原の英語力は、ほぼネイティブレベルの優れたものだったと言われています。そんな英語力と持ち前の社交性で、アメリカ社会に溶けこもうと努力していた埴原を、アメリカ人たちは歓迎していきました。日本とアメリカの良好な関係に、埴原は大きく貢献していたのです。

外務次官時代には、シベリアに取り残されたポーランドの孤児765人を救出するために奮闘し、日本に招いて手厚く保護しました。こつこつと経緯もあり、ポーランドには今でも親日家が多いと言います。これは、日本が積極的に関わった最初の人道外交と言えるでしょう。

第2次世界大戦中にユダヤ人移民にビザを発給し「東洋のシンドラー」と評された外交官・杉原千蔵は、早稲田大学の後輩にあたります。埴原のこつこつとした活動から杉原も人道支援の重要性を認識したのだと考えることは、けっして突飛な発想ではないはずです。

また、ワシントンに咲いている桜の花は、親日家のシドモア女史が発案して日本から移植したものだというのは有名な話ですが、アメリカにおいて日本側の実務を

英語好きの少年が、駐米大使になるまで

山梨出身の外交官・埴原正直の生涯



■94年前、執務室の埴原：特命全権大使就任翌年に撮影(米国議会図書館蔵 LC-F8-22481)

埴原の業績に
注目しよう

現在、山梨県南アルプス市の南アルプス市立中央図書館、郷形生涯学習センターにある「南アルプス市ふるさと人物室」では、「外交官 埴原正直×使命」と題した企画展示が行われています。

明治9年(1876年)に巨摩郡源村(現・南アルプス市)に生まれ、外務次官、駐米大使となって日米関係の発展に尽力した埴原正直を、再評価しようという企画です。

埴原は、その功績に比べて残されている資料が少なく、地元でも、忘れられつつあった人物です。しかし近年、その生涯に再び光が当たろうとしています。

2011年に、山梨県在住の著者がこつこつと調べ上げた人物伝「駐米大使 埴原正直」が刊行されました。また、チャオ埴原三鈴さん、中馬清福さん共著による「排日移民法」と闘った外交官 一九二〇年代日米外交と駐米全権大使・埴原正直」という研究書も出版されました。

「駐米大使 埴原正直」の著者は、「埴原が全権大使として活躍した当時、彼は間違いなく山梨でいちばん有名な人物だったはずですよ」と語ります。当時の駐米大使といえば、外交官のトップ。もしかしたら、総理大臣になっていたかもしれないというほどの存在でした。

英語好きの
わんぱく少年だった

早稲田大学OBである著者は、明治期の卒業生のことを調べると、同郷でもある埴原のことを知り、興味を持ちました。ほとんど資料が残っていないことがから、もっと埴原のことを知りたいと思った著者は、可能な限りの資料にあたただけでなく、地元に関係者を訪ね歩き、地道な調査を進めて、埴原の生涯を追いしました。

小学校の頃から成績優秀だった埴原ですが、英語の得意な先生の影響で英語を学びたいと考え、その先生に課外授業で教わったと言います。小学校の作文を英語で書いたという逸話が残るほど、英語が得意になったそうです。

「海のない山梨県の山村で、外国文化に触れる機会もなかったはずの埴原ですが、直感的に自分に必要なのだと感じたのかもしれませんね」と著者。

少年時代の埴原は、わんぱくで負けん気、ケンカも多かったといえます。生来の頭の良さで負けず嫌いな性格が、埴原を勉強に駆り立てたのかもしれない。

明治27年には、東京専門学校(現在の早稲田大学)に入学し、英語政治科にて、政治や外交を学びます。当時の埴原を評しては「成績抜群」「容貌秀麗」という言葉が残っています。勉強ができただけではなく、相当の美男子だったといっています。



■東京での学生時代、羽織姿の埴原

担っていたのは、じつは埴原でした。埴原はアメリカ社交界における恋人であったシドモア女史のために奔走したのです。のちにシドモア女史は、スイスのジュネーブで亡くなりましたが、埴原はスイスから遺骨を移送し、彼女の兄が眠る横浜で納骨式を行いました。

最も輝く外交官であった埴原ですが、当時アメリカで成立した「排日移民法」によって立場が悪くなり、外交界を離れることになってしまったのです。

英語好きの少年は、日本を愛し、アメリカを愛し、多くの人に愛された生涯を送りました。重要だったのは、才能があったことではなく、自分の得意な分野を見つけたこと、その道に向かってがむしゃらに努力を続けたことでした。私たちは、埴原からまだまだ多くのことを学ぶことができます。

■アメリカ赤十字社にて関東大震災の支援協議(左端が埴原、フーバー事務局長らと)

